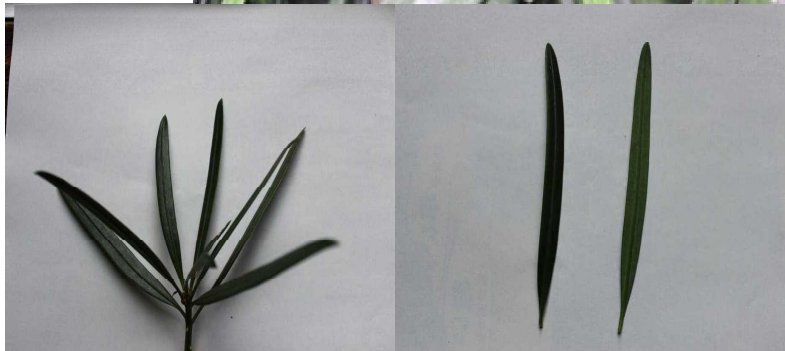
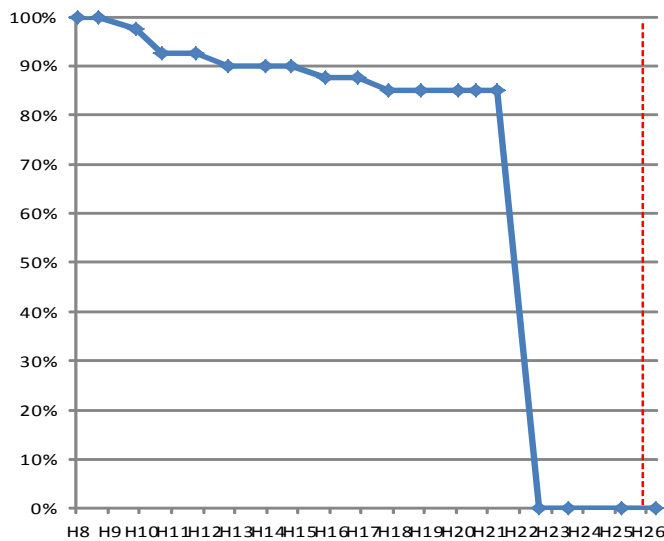


樹種名	イヌマキ	
科 目	マキ科	
学 名	<i>Podocarpus macrophyllus</i>	
分 布	イヌマキは、常緑針葉高木であり、関東から四国、九州、沖縄、国外では台湾の比較的暖かい地域に分布する。 海岸に近い山地に多く自生する。庭木として植えられ、生け垣に利用されることも多い。	
樹木特性	陰樹であり、ふつうは低地の照葉樹林中に生息するが、まれに海岸近くに占有した林をつくる。	
用 途	材は水湿に強いので、建築材の他、屋根板・樋・棺・風呂桶・下駄材などに利用される。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	600 本／0.13ha (4,500 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 常緑針葉樹の高木で高さ 20m ほど。樹皮は白っぽい褐色で、細かく薄く縦長にはがれる。茎はまっすぐに伸び、枝先は上を向くが、大木になると枝先は下垂する。葉は細長い、扁平で主脈がはっきりしており、いわゆる針葉樹の葉には見えない形をしている。 雌雄異株。雄花は前の年の枝に多数つき、穂状で垂れ下がり、黄色い。雌花は 1cm ほどの柄の先に小さな包葉があり、その中の 1 つが伸びて、その先端部に胚珠を含む。胚珠を含む部分が膨らんで種子となり、その基部も丸く膨らむ。基部の膨らみは花床と言われ、熟すると次第に赤くなり、少々松脂臭いものの甘く、食べられる。 種子は緑色になって白い粉を吹く。こちらは毒成分を含有し、食べられない。 全体としては緑と赤色の団子を串刺しにしたような姿となる。鳥などがこの花床を食べるときに種子散布が起こると考えられる。種子はまだ樹上にあるときから発芽を開始することがあり、これを胎生種子と呼ぶ。	
試験地での様子	普通苗を植栽し順調に成長していたが、キオビエダシャクが大量発生し、全木を伐採した。	
被 害	平成 21 年 9 月にキオビエダシャクが大量発生し、木酢液、石灰等の散布を行ったが、被害を押さえることができず全木を伐採した。野兎・鹿の食害については特になかった	

イヌマキ 現存率



【現存率】

平成 21 年 9 月にキオビエダシャク（下記写真）の大量発生により全木を伐採した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



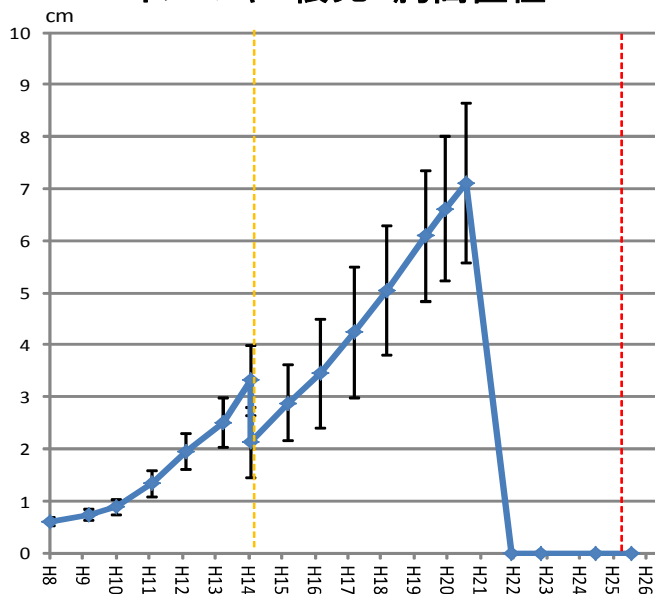
【根元・胸高直径】

平成 21 年度までは現存する樹木は順調に成長していた。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

イヌマキ 根元・胸高直径

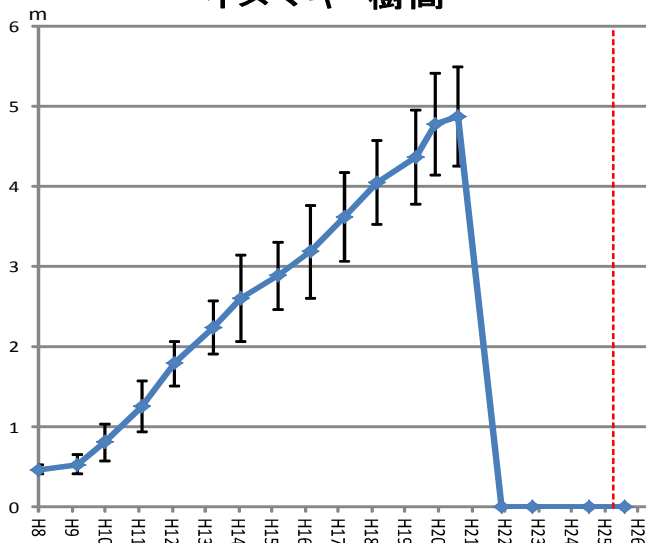


【樹 高】

植栽後、平成 21 年度までは現存する樹木は順調に成長していた。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

イヌマキ 樹高



《プチ情報》

単にマキともいう。本来は、別にあるマキなる木に対して、それよりも劣るものとして、この種のことをいやしんでつけられた名である。古くはスギ（杉）のことをマキとよんでいたことから、これに対するものとの説、あるいは、紀伊半島や四国地方ではコウヤマキを本楨と呼ぶことから、これに対しての命名とする説もある。ただし、材の使用に関しては、それほど劣るものではない。特に水に強いことから、風呂桶などにも用いられる。

沖縄県では、古くから木造住宅の高級建築材として利用されることがあり、国の重要文化財である中村家住宅や首里城等に用いられている。これはイヌマキが強い抗蟻性を持ち、住宅の天敵であるシロアリに強いからである。